高付加価値の果樹を観光資源とした農村における観光地マネジメント手法の一考察
−山梨県甲州市勝沼地域の来訪者の属性と移動手段の分析を中心に−

髙橋　瑞季
山梨大学生命環境学部地域社会システム学科４年

１　研究の背景と目的

高度経済成長以降、農村から都市部へ人口が流出した結果、農村では地域コミュニティの喪失や弱体化が進行した。そして、現在、地域の維持のため、どのように定住人口や交流人口を増やすかが重大な課題のひとつとなった。そのための取り組みとして、グリーンツーリズムをはじめとする農村での観光地域づくりが地域住民や行政により行われている。

本研究では、「高付加価値の果樹」を観光資源とした農村を対象に、その資源の特性を活かして当該地域を観光地としてマネジメントするための手法の一端を明らかにすることを目的とする。ここでいう「高付加価値の果樹」とは、五感に依拠した嗜好品的価値やその高額な流通価格を前提に、果物狩りなどの体験型の観光と親和性が高い果樹とする。

このような高付加価値の果樹は、観光の動機の他、体験型の観光などの魅力的な観光コンテンツにもなりやすい一方、実際の観光では、主たる観光行動は果樹の購入にとどまり、地域内の回遊性を高め、当該地域の多様な魅力を五感に働きかけるような仕組み、求められる条件などが十分に確立されているとはいえない。

こうした課題の一端を検討するため、本研究では、高付加価値の果樹を観光資源とした農村において、来訪者の食生活や属性、観光行動から実態と課題を分析・把握する。加えて、域内における自動車以外の移動手段としてのレンタサイクルについて、現状の行動特性の分析に基づき、移動手段としての可能性と現状の課題について把握する(図１)。

こうした分析を通じて、高付加価値の果樹を観光資源とする地域における、来訪者の特性と地域の多様な魅力の発信を前提とした観光地マネジメント手法について、特に域内交通という観点を中心に考察する。

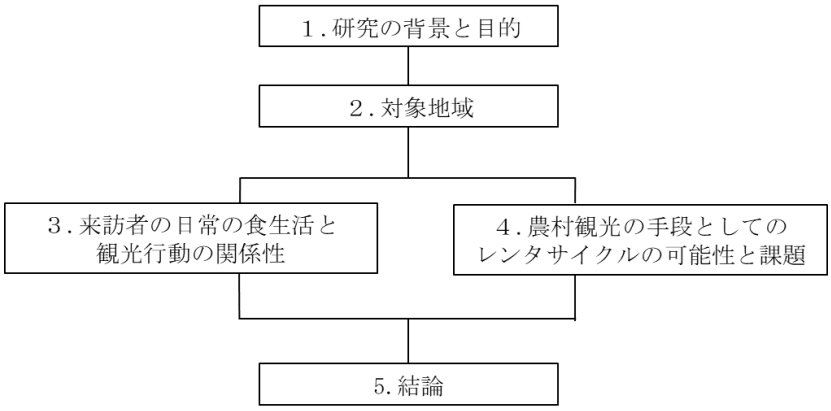

図１　研究のフロー（筆者作成）

２　対象地域

本研究では、高付加価値の果樹を観光資源とする典型的な農村地域である山梨県甲州市勝沼地域を対象とする。当該地域はブドウ栽培やワイン醸造を主たる産業とし、ブドウやワインを主要な観光資源とし、特に戦後にはそれらを活かした観光地として発展してきた。地域全体にブドウ畑が広がり、観光ブドウ園やワイナリーが数多く立地する。また、地域内に高速道路や鉄道が通っていることからアクセスがよい。他方、入込観光客数は、ブドウの収穫シーズンである８月～10 月頃とそれ以外の時期で大きな差が生じ、生産性や雇用の面からの課題もある。

３　来訪者の日常の食生活と観光行動の関係性

（１）本章の目的

日常の食生活の嗜好が観光動機と大きく関係することを踏まえ、日常の食生活と観光動機の関係性を明らかにするため、来訪者へのアンケート調査に基づき、当該地域の来訪者の日常の食生活や飲酒、現地での観光行動を把握する。そして、調査結果に基づき、高付加価値の果樹を観光資源とする農村の現状と課題を考察する。

（２）アンケート調査の概要

調査は、勝沼地域の観光シーズン最盛期である９月４日間（祝・休日）に、観光施設「かつぬまぶどうの丘」（以下、ぶどうの丘とする）にて実施した。調査は調査員による配布後、自記式で行い、回収数は 355 枚、うち有効回答数は 352 枚だった。

質問内容は、①ブドウ及びワインの日常的な摂取に関する設問、②勝沼を訪れた来訪目的に関する設問、③交通手段や観光ルートといった当日の観光行動に関する設問をそれぞれ設定し、それに来訪者の属性に関する設問を加えて構成される。

（３）調査結果の分析と考察

日常的な食生活においては、ブドウを「シーズンに１回程度」の摂取とする回答がもっとも多く、日常的に摂取する傾向は見られなかった。リピーター層ほど、市場における流通の少ないブドウ品種までを認識しており、来訪頻度がブドウに対する知識に影響を与えていることがわかった。

また、勝沼地域の来訪者においてアルコールの愛飲者が顕著に多いわけではないが、ワインに関しては日常的に飲むアルコールの種類としては高い割合を占める。ただし、ワインの産地に関するこだわりをもった層が多いわけではないことから、日常的にワインを飲むが、ワインに関して特にこだわりの強い層ではないことが考えられる。

観光行動では、「ブドウ狩り」については顕著な差は見られない。また、リピーター層では、高付加価値の産品であるブドウやワインについて産地で購入するということが来訪の動機として働いていることが考えられる。前述の通り、市場流通が少ないブドウ品種の認知

がリピーター層で顕著に高いこともそうしたことによるものと推測される。

現地における観光行動については、ぶどうの丘来訪の前後で、観光ブドウ園でのブドウ購入やブドウ狩りを中心におこなうといった行動が多くみられるが、ここで来訪対象となる観光ブドウ園は、ぶどうの丘周辺のものが多く、結果的にぶどうの丘近隣に人が滞留していると考えられる。他方、ぶどうの丘から離れ、ワイナリーを訪れる場合には、単に試飲のみ目的として来訪しているのではなく、ブドウ畑などを展望しながらの食事など、ワインにとどまらない広い目的をもっている。これは、カフェを併設したワイナリーに食事を目的に訪問している層が顕著に見られることからも明らかである。

こうした分析を通じて、現在の勝沼地域では、ぶどうの丘近辺や一部のワイナリーなど、一部エリアに集中して人が滞留しており、多様なワイナリー、観光ブドウ園など、地域全域に広がる多様な観光資源をもちながら、自家用車を中心とした移動手段で十分な回遊性が生まれていないことが明らかとなった。

こうした中で、どのようにして地域全体への回遊性を生み出し、景観、あるいは勝沼地域の多様な資源の魅力を認知し、また実際に体験してもらうのかが、リピーター層の来訪目的の多角化などにおいても重要な課題といえる。

そうした手法のひとつとして、移動手段の多角化が考えられる。アンケート調査の結果から、勝沼地域を来訪する観光客の半数程度が自動車、３割強が電車によって訪れている。自動車で訪れた場合、その多くは域内でも自動車を使って駐車場を併設した場所を点と点を結ぶように観光をする。それ故、行動範囲は制限がかかり、また、点と点の間は深く観察する時間もなく過ぎてしまう。電車の場合も、域内を移動するバスは本数が極めて少なく、観光客向けの移動手段として効果的に機能していない。また、バス停・運行ルートの制約から、徒歩移動を避けた場合、来訪できる場所にも制限がかかる。

こうした中で、地域の産品であるブドウ・ワインの購入を超えて、地域の魅力に対する理解を促すため、面として地域を体験できるような効果的な域内交通手段が求められている。

４　農村観光の手段としてのレンタサイクルの可能性と課題

（１）本章の目的と分析方法

レンタサイクルに代表される自動車以外の域内交通手段は、地域の魅力を積極的に発信し、観光対象を点から面へと展開するための仕掛けのひとつとして有効である。そのため、本章では新たな域内交通手段の可能性と課題を明らかにし、効果的な域内交通手段の在り方を考察するため、現在、甲州市によって運用されているレンタサイクルシステム「ぐるりん」について、利用時に得られた移動軌跡データ（GPS 座標など）から観光客の行動特性を分析する。

甲州市によって事業化されているレンタサイクル「ぐるりん」において、利用時に取得され、管理者のサーバーに保存された移動軌跡データ（GPS 座標など）から、時期ごとの利用台数などの変動について把握するとともに、GIS ソフトウェア（ESRI ArcGIS Pro）を用い

て、ポイントの集積分布を計算するカーネル密度解析と、ポイント間を結ぶラインの密度を計測する線密度解析の２つの手法を用いて解析を行い、その結果を分析する。

（２）年間のレンタサイクルの利用実態

もっとも稼働していた時期は８月～11 月であり、勝沼地域の観光の繁忙期にあたる。また、12 月に入ると繁忙期の半分以下の台数に減少する。こうしたデータを勝沼地域の観光動向と対応させた場合、８月は夏休みのため家族連れの観光客の増加、９月・10 月・11 月はブドウの収穫シーズンによるブドウ狩り需要やワインの新酒需要などによりブドウやワインを求める観光客の増加と対応するものと推測される。また、３月や４月も稼働台数は多いが、これは勝沼ぶどう郷駅を起点とした塩山方面への花見の需要が高まるためと考えられる。

また、日別では休日の稼働が多い傾向がある。特に繁忙期は平日との稼働台数の差が著しい。

（３）レンタサイクル利用者の行動特性

レンタサイクルを利用した観光行動は、１年を通して、ぶどうの丘のみでなく、勝沼地域全域に移動が見られることがデータより明らかとなった（図 a～図 f）。訪問先については、繁忙期に特定の場所に人が集中している。例えば、観光ブドウ園は８月・９月の収穫シーズン、ハーブ庭園は８～10 月に集中している。ワイナリーの訪問は年間を通じて集中が見られ、特に原茂ワインの訪問率は高い。他方、繁忙期以外では特定の訪問先に限定しないかたちで多様な場所に訪れている。

繁忙期においても観光ブドウ園やワイナリーへの移動は多いが、結局は前述のような観光スポットを点と点を結ぶような移動が行われており、利用者の移動ルートが画一化されていることが指摘される。また、裏道（農道）などを通ることは通年を通して見られ、バスや自家用車などの車を利用した観光客に比べ、勝沼地域の多様な資源に触れる機会につながっている。

以上の分析をレンタサイクル利用時と車利用時で分け、「行動範囲」「訪問先」「移動ルート」「時間」という４つの視点で整理した（表１）。

<table>
<tr><td></td><td>車</td><td colspan="2">レンタサイクル</td></tr>
<tr><td rowspan="2">行動範囲</td><td rowspan="2">ぶどうの丘中心</td><td>繁忙期</td><td>繁忙期以外</td></tr>
<tr><td colspan="2">勝沼全域</td></tr>
<tr><td>訪問先</td><td>特定の場所</td><td>特定の場所</td><td>多様化（ワイナリー中心）</td></tr>
<tr><td>移動ルート</td><td>点から点</td><td colspan="2">点から点＋裏道（農道）</td></tr>
<tr><td>時間</td><td>早い</td><td colspan="2">遅い</td></tr>
</table>

表１　レンタサイクルと車利用時の行動特性の比較（筆者作成）

まず、「行動範囲」については、車と比べて勝沼地域全体を行動エリアとしていることである。この点については、通年を通じてのレンタサイクルに優れている点として位置づけられる。

また、「訪問先」「移動ルート」については、自動車同様にレンタサイクルの場合も、特に繁忙期においては、訪問先が特定の観光スポットに集中しており、かつ移動ルートが特定の観光スポットを点から点へとつなぐ移動となる傾向が強い。なお、レンタサイクル利用者の場合、繁忙期以外については訪問先の多様化により、移動ルートも分散する。こうした時期による違いについては、観光客の回遊性向上、魅力の認識の向上を目的とした訪問先・ルートの多様化における課題として残る。

また、「時間」については、移動手段の特性上、一般的に車より自転車の方が移動に時間を要し、さまざまな立ち寄りも可能になることから、滞在時間の長期化に繋がりやすい。

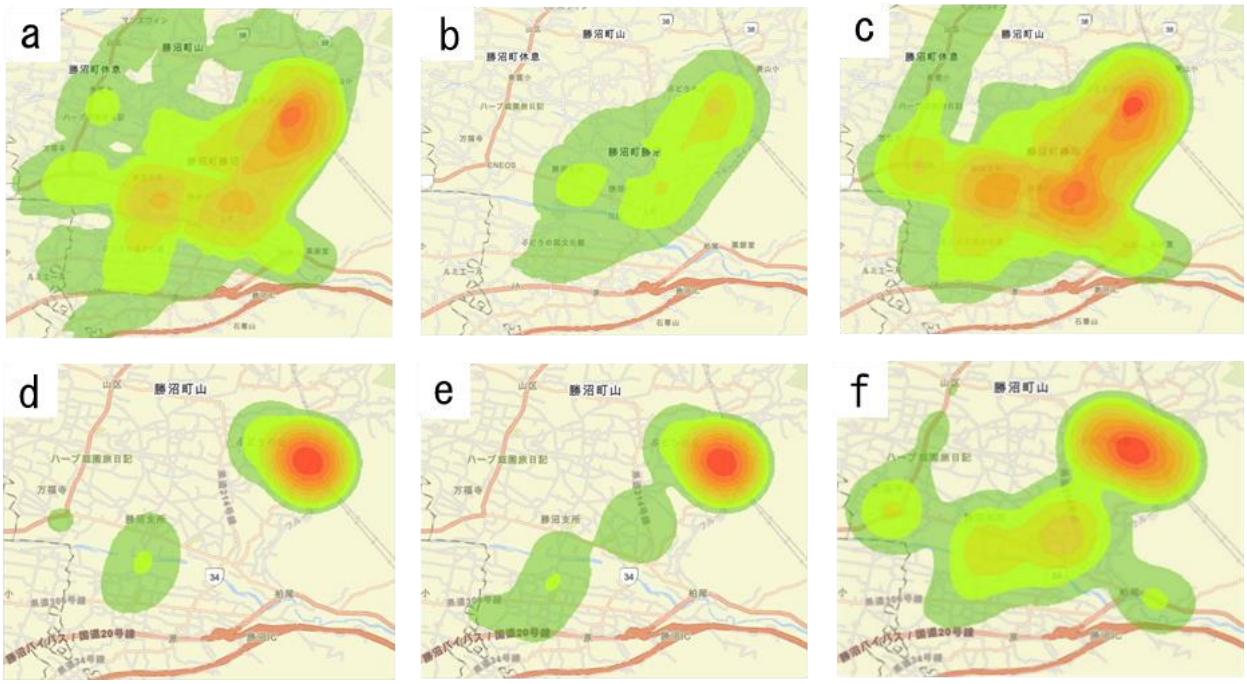

図２　レンタサイクル移動軌跡データ（GPS 座標）に基づく移動ルート及び滞留地域の分析（カーネル密度・線密度）
（筆者作成（ベースマップ：OpenStreetMap））

a：2018 年４月（線密度）　b：2018 年７月（線密度）　c：2018 年 10 月（線密度）
d：2018 年４月（カーネル密度）　e：2018 年７月（カーネル密度）　f：2018 年 10 月（カーネル密度）

このような状況を踏まえ、レンタサイクルなどの新たな交通手段の普及によって、回遊性向上や魅力認識の向上に資するためには、その長所を活かし、潜在的なレンタサイクル利用者への訴求を通じて、利用拡大につなげていくことが求められる。他方、繁忙期を中心に訪問先・ルートが特定の場所に集中しやすいという状況に関しては、繁忙期以外の状況を踏まえ、勝沼地域の情報発信を積極的におこなうことで、地域内に点在する多様な観光資源の認知を向上させ、ルートの分散化を図ることに繋げられると考える。

５　結論

本研究では、高付加価値の果樹の生産を観光資源とした農村において、来訪者の食生活や属性、観光行動から実態と課題を把握し、農村を観光地としてマネジメントするための手法の一端を明らかにすることを目的に、高付加価値の果樹を観光資源とする農村の典型的な地域である山梨県甲州市勝沼地域を対象地域として分析をおこなった。

その結果、３では、来訪者に対するアンケート調査の分析から、来訪者の日常的な食生活に関して、ブドウの品種やワインの産地に大きなこだわりのない層が中心を占めていることが分かった。また、ブドウ品種についてはリピーター層のほうが顕著に高く理解しているという結果も出た。来訪目的では、すべての来訪者を対象にした場合ブドウ狩りやワインの試飲が上位を占めているが、リピーター層ではブドウやワインの購入が大きく働いていることがわかった。また、現地での訪問先では、自動車を中心とした観光形態ではワイナリー、観光ブドウ園など、全域に広がる多様な観光資源に対して十分な回遊性を持たないことがわかった。

４では、こうした点を踏まえ、域内の移動手段として運営されているレンタサイクルに着目し、利用時の GPS データに基づき、利用者の行動実態を分析した。その結果、一年を通して勝沼地域全体を回遊しているものの、主要な観光スポットを点から点へと移動するような状態であることが明らかとなった。また、繁忙期では特定の場所が訪問先に集中しやすく、その他の時期ではワイナリー中心ではあるが多様な場所を来訪していることもわかった。

本研究で明らかになった課題を踏まえ、より効果的な観光地マネジメントへとつなげていくためには、レンタサイクルの最適なスポット数などの整備や、それを運営する組織の在り方などより具体的かつ実務的なマネジメント手法をあわせて検討することが求められるが、その点については別稿に委ねることとしたい。